

“新型うつ” 性格傾向と抑うつの関連についての心理学的考察 ～ストレス対処能力(Sence of Coherence; SOC)に焦点をあてて～

関 陽一¹ 根津 克己²

近年、従来とは違ううつ病像を持ついわゆる“新型うつ”の増加が指摘されている。“新型うつ”の発症の要因としては、社会構造の変化や教育の影響が指摘される一方、職場のコミュニケーション不足など人材育成面の問題を指摘する声もある。本研究では“新型うつ”のパーソナリティと抑うつ症状の関係について心理学の知見で検討を行い、人材育成と関連のあるストレス対処能力(SOC)の影響を検討した。結果、“新型うつ”パーソナリティ傾向の者はSOCが低く、抑うつ傾向は高いという関係が示された

キーワード：“新型うつ”, SOC (Sence of Coherence : ストレス対処能力), 自己愛

1. 問題と目的

1-1問題

近年、従来とは違ううつ病像を持ついわゆる“新型うつ”が目立ってきている。“新型うつ”は20～30代に多く、その言動から職場でのトラブルが多くなっている(松崎ら, 2011)。“新型うつ”については多くの臨床家の提唱例があるが、共通点は若年での発症, 他罰的, 規範の嫌悪, 評価過敏性, 自己愛的な傾向などである。

“新型うつ”については、これまで多くの臨床家が病像や発症の背景などについて考え方を示しているが、それらはそれぞれの観察・経験に基づくものであり、特徴の整理にとどまっており、分類は恣意的な面があることは否めない。そして臨床家の多くは精神科医であり、心理学の視点で考察された研究は少ない。また、自己愛, 他者評価過敏性, 低い規範意識, 他罰的, 回避傾向などといった“新型うつ”のパーソナリティ特徴についての実証的な研究も少ない。

1-2目的

本研究では、“新型うつ”のパーソナリティと抑うつ症状の発症について心理学の知見で検討を行い、有効な介入方法につなげることを目的とする。そして特に“新型うつ”と抑うつとの関連性が示唆されるSOCに焦点をあて検討を行う。具体的な介入については人材育成の視点を持った対応が必要と考える。それは“新型うつ”の要因には経験不足などの未成熟な人格があることも多いためである。そこで困難な状況を乗り越え力であるSOCを向上させ、働く力を向上させるアプローチにつなげることを目標とする。

仮説としては、“新型うつ”傾向の者はSOCが低いいため、抑うつ傾向が高くなっている、というモデルをもとに検討する。

1-3 ストレス対処能力 (Sence of Coherence;SOC)

前述のとおり、松崎(2010)は、未熟型人材はストレスを上手にコントロールする能力を育てるためにストレス対処能力 (Sence of Coherence; 以下, SOC)を参考にすべきと指摘している。ここで“新型うつ”への介入に有効と考えられるSOCについて概観する。

1-3-1 SOCとは

SOCとは, Antonovsky (1979,1987) が提唱した「ユダヤ人の強制収容所という過酷な環境においてでも健康を保持できた一群から抽出された概念」である。直訳すると首尾一貫感覚であり、自分の生きている世界は首尾一貫している (coherent), つまり筋道が通っている、腑に落ちるという感覚である。だが、山崎(2009)はわかりやすさの点からSOCを日本に紹介した当初より、何をどのように感じている感覚なのかを表現する「首尾一貫感覚」ではなく、何に対してどのような働きをする「ストレス対処能力」を呼称として用いてきた。本研究でも「ストレス対処能力」を呼称として用いる。

SOCは「ストレス下にあっても健康を保ったり、それらを糧にして成長しようとする人が共通して持つ要因」(藤里・小玉, 2009)であり、ストレス耐性や適応力が低い、あるいは困難に対して立ち向かわない、という特徴を持つ“新型うつ”の病態像に欠如している力であり、有効な介入につながる可能性が考えられる概念である。(関・根津, 2014)

1-3-2 SOCの3つの下位概念

SOCには①有意味感②把握可能感③処理可能感、の3つの下位概念があり、松崎(2011)は以下のように説明している。

1 大阪大学大学院連合小児発達学研究所

2 東京成徳大学

有意味感とはどんなことにも意味を見出す力であり、生活の中で出会った出来事に対して、それが自分にとって意義があり、価値があると思える感覚。仕事でいえば同じ仕事でもいやいやするのではなく、自然と前向きに取り組める力である。興味が無い仕事でも「将来的に役立つかもしれない」など前向きに取り組めるとストレスも軽減する。

把握可能感とは状況を把握し、先を見通す力であり、自分の置かれている状況を理解でき、これからの見通しをある程度予測できる力である。仕事でいえば、長期にわたるプロジェクトなどでも先を見通せる力である。「あと1ヶ月で一息つき、余裕ができるな」など、希望を見出せると大変な状況でも息切れせずがんばることができる。忙しくても、今の状況が全体の中でどの工程なのかを把握できると、心理的圧迫感を減らすことができる。

処理可能感とは、きつとうまくできると確信する力であり、出会う出来事に対して何とかできるだろうと思える感覚である。仕事でいえば新しい課題に向き合ったときに「これまでの経験や周囲の助けなどがあるのだから、うまくできるだろう」とある程度楽観的に思える力である。処理可能感が低いと新たな課題に対して不安に感じてしまうが少しずつでも課題を乗り越えて、自信がついていくと処理可能感が高まる。

このようにSOCは、鍋田(2012)が指摘している「周囲のシステムに沿って適応していくことが要請される生き方をきて、外界の枠組みが自分に合わなくなると途方に暮れ、うつ的に傾く」という、経験の少なさが要因でうつになると思われる“新型うつ”の人たちに対して、有効な介入となる可能性があると考えられる。

1-3-3 SOCと自己能力概念との違い

SOCは自己能力概念と似た概念と思われるが、その違いについては山崎(2009)が以下のように述べている。

自己概念や自己能力概念には自分を価値のある存在と思うセルフエスティーム(自尊感情)や必要とされる行動は自分は実行できるという確信を意味するセルフエフィカシー(自己効力感)などがある。これらの概念では周囲の人々や環境と対峙する自己が想定され、それらと比べて自分の存在や能力は優位にあるという確信、そういう自分に光が当てられている。それに対して、SOCでは周囲の人々や環境とともにある自己が想定され、その人の生活世界を構成する自分と、自分以外のそれら周囲の人々や環境などへの信頼、言い換えれば、信頼のおける周囲の人々ともあるいはそうした環境下で自分は生きているという確信に光が当てられている。したがって例えばいざというときには頼ればいい、頼りにできる人がいるという他者への信頼や依存や安心は、自尊感情では「依存的な自己」を「弱

い自己」としてマイナスに評価される可能性があるに對し、SOCではむしろプラスに評価される。

このように、山崎(2001)はSOCが自己に対して、とりまく他者や環境への信頼を捉えていることを強調している。このことから職場への帰属意識が低いと指摘される“新型うつ”に欠如する特徴だと考えられる。

1-3-4 SOCと抑うつとの関係

SOCと抑うつとの関係については奥津ら(2008)が「①SOCが高いと抑うつ度が低く、SOCが低いと抑うつ度が高い傾向にある②SOCが高いと新たなライフスタイルへの適応がスムーズに進むが、SOCが低いと、適応が困難になる可能性がある③新たなライフスタイルへの適応を進めるためには、患者自身のSOCが高まるような関わりを行うほうがより効果的である可能性がある」と述べており、SOCと抑うつが高い関連性を持っていることを指摘している。

1-3-5 SOCと“新型うつ”—人材育成の観点として—

SOCと新型うつについての関係性についてはどうだろうか。松崎(2010)は新型うつ病への対応策として、人材を育てるという視点をもって対応する必要性を指摘している。新型うつ病の原因には、経験不足や未成熟な人格があることも多いため人材育成の視点を持った対応が必要であり、また、新型うつ病になる人は、もともと、仕事をする能力が低いわけではなく、企業には人格的な成長を促すことを求めている。そこで強いストレスのかかる困難な状況乗り越えるためにSOCを高まるとストレス耐性が上がり、精神的な成長につながる、とSOCを高める必要性について言及している(松崎2010)。また鍋田(2012)が行った調査でも、うつ病者にSOCの低い傾向があることが確かめられており、SOCを高めることが有効な介入につながることを示唆されている。

2 方 法

2-1 前提とした考え方

実際にうつ病と診断をされたり、うつ病により休職している人を調査対象とするのは困難であるため、企業に勤める健常な人を対象とした。そしてその中から、“新型うつ”パーソナリティ傾向があるもの抽出する方法をとる。企業に勤める者に限定した理由は、“新型うつ”の発症は、一般社会で競争原理に直面することがきっかけとなる場合が多い(樽見・神庭,2005)ことから、実際にそのような経験をしている可能性がある人を対象とする必要があると考えたためである。年代は“新型うつ”に多いとされている(広瀬,1977;松浪,1991,阿部,1995樽味,2005)20歳代～30歳代の者に限定した。

そして本研究では“新型うつ”パーソナリティと抑うつとの関連性を明らかにすることを目的としているが、“新型うつ”パーソナリティは、島(2010)が示した

“新型うつ”カテゴリーにおける特徴の共通項（他責性・自己愛的・組織への一体感拒否）、日本うつ病学会（2012）が示した新型うつ病の特徴、あるいは坂戸ら（2005）が示したうつ病と関連するパーソナリティ特徴（対人敏感性・社会規範性の乏しさなど）などを参考にして、自己愛、他者評価過敏性、規範意識度に着目し“新型うつ”パーソナリティとして捉えることとした。

2-2 方法

2-2-1 調査手続きと調査対象者

企業に勤める20歳代～30歳代の者に対し、質問紙を縁故法により個別に配布（513名）し、無記名にて回答を求めた。質問紙は郵送にて回収を行った。回答のあった241名（回収率47.0%）のうち、全項目に回答があったものを有効回答として、180名（男性84名、女性96名、平均年齢31.55才SD=4.72）を調査対象とした。

2-2-2 調査時期

2012年8～9月

2-2-3 質問紙の構成

①フェイスシート

性別、年齢の記入を求めた。

②自己愛

“新型うつ”パーソナリティの構成項目である。小塩（1998）による「自己愛人格目録短縮版（NPI-S）」（以下、「自己愛尺度」）を使用した。この尺度は健常者にある自己愛人格傾向を測定するための尺度である。30項目で以下の3つの下位尺度から構成されている。

「優越感・有能感」

他者よりも優れているといった強い自己肯定感を意味する。

「注目・賞賛欲求」

他者から注目や賞賛をされたいという欲求を意味する。自己防衛的で他者の評価を気にする傾向に関連する。

「自己主張性」

自分の考えをやや自己中心的に他者に主張する行動を意味する。他者の評価を気にしない傾向に関連する。回答方法は「まったく当てはまらない（1点）」「どちらかという当てはまらない（2点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかという当てはまる（4点）」「とてもよく当てはまる（5点）」の5件法で回答を求め、項目の合計点が高いほど、自己愛人格傾向が高いことを示している。

③他者評価過敏性

笹川ら（2004）による「他者からの否定的評価に対する社会的不安尺度（FNE）短縮版」（以下、「他者評価過敏性尺度」）を使用した。現在、社会不安研究で最も頻繁に用いられている社会的不安尺度（FNE）（30項目）の短縮版である。12項目で構成され、回答方法はそれぞれの項目について、「全く当てはまらない

（1点）」「ややあてはまらない（2点）」「どちらでもない（3点）」「ややあてはまる（4点）」「非常にあてはまる（5点）」の5件法で回答を求め、合計点が高いほど、他者からの否定的評価に対する社会的不安（他者評価過敏性）が高いことを示している。

④規範意識度

Yamagichi et al.（1995）による「集団主義尺度（改訂版）（質問文中の語句の一部を企業組織用に改変して使用）」（以下、「規範意識度尺度」）を使用した。山口（1998）は集団主義を“個人の目的よりも集団の目的を優先すること”と定義している。本研究では集団の目的を規範意識と捉えて本質問紙を用いた。

14項目で構成され、回答方法はそれぞれの項目について「全く当てはまらない（1点）」から「非常によく当てはまる（5点）」までの5件法で回答を求め、合計点が高いほど、集団主義傾向（規範意識度）が高いことを示している。

⑤SOC

山崎（2001）による「SOC質問票日本語版」（以下「SOC尺度」）を使用した。29項目で「有意味感」、「把握可能感」、「処理可能感」の3つの下位尺度で構成されている。回答方法はそれぞれの項目について「1に書いてあることが完全に当てはまる（1点）」「7に書いてあることが完全に当てはまる（7点）」「1でも7でもないように感じるならば、あなたの気持ちをもっともよく表す数字（2～6点）」の選択による7件法で回答を求め、項目の合計得点が高いほど、SOC傾向が高いことを示している。

⑥抑うつ傾向

ベック（1974,1988）が開発し、田中ら（1998）が日本版を作成した「ベック絶望感尺度」（以下、「抑うつ尺度」）を使用した。この尺度は「将来への否定的な期待（negative expectancies about the future）」と定義する絶望感を測定する。絶望感は抑うつ認知理論ではうつ病の原因であると仮定されているが、抑うつを構成する重要な症状そのものである。したがって絶望感が将来の抑うつを予測し易抑うつ性に関連すると考え、本尺度を用いた。20項目で構成され、回答方法はそれぞれの項目について「はい（hopeless=1点）」「いいえ（hopeful=0点）」の2件法で回答を求め、合計得点が高いほど、絶望感（抑うつ）が高いことを示している。

3 結果

3-1 記述統計（各尺度得点に関する平均値及び標準偏差）

各尺度得点に関する平均値および標準偏差は以下の通りである。（Table 1）

Table 1 各尺度得点の記述統計 (n=180)

尺度	M	SD
注目賞賛欲求	29.01	7.1
優越感有能感	25.79	6.41
自己主張性	29.64	6.18
他者評価過敏性	38.18	8.83
規範意識度	43.73	6.15
有意味感	38.26	8.55
把握可能感	41.13	9.57
処理可能感	45.44	8.67
抑うつ	6.47	4.5

3-2 尺度ごとの相関

自己愛（注目賞賛欲求，優越感有能感，自己主張性），他者評価過敏性，規範意識度，SOC（有意味感，把握可能感，処理可能感），抑うつ傾向それぞれの間の相関係数を Table 2 に示す。

Table 2 各尺度間の相関係数

	自己愛					SOC		
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
I 注目賞賛欲求								
II 優越感有能感	.413**							
III 自己主張性	.367**	.452**						
IV 他者評価過敏	.280**	-.207**	-.319**					
V 規範意識	.029	-.101	-.233**	.209**				
VI 有意味感	.111	.422**	.280**	-.224**	.200**			
VII 把握可能感	-.126	.391**	.157*	-.518**	.053	.474**		
VIII 処理可能感	.016	.419**	.250**	-.418**	.115	.750**	.696**	
IX 抑うつ	-.077	-.412**	-.276**	.278**	-.108	-.751**	-.492**	-.726**

*P. < .05, **P. < .01

自己愛尺度の3つの下位尺度の注目賞賛欲求，優越感有能感，自己主張性と，他者評価過敏性では注目賞賛欲求が有意な正の相関 ($r=.280, P<.01$) を示したのに対して，優越感有能感と自己主張性は有意な負の相関（優越感有能感 $r= -.207, P<.01$ ；自己主張性 $r= -.319, P<.01$ ）を示した。また同様に SOC の3つの下位尺度である有意味感，把握可能感，処理可能感とでは優越感有能感と自己主張性のみが有意な正の相関（優越感有能感：有意味感 $r=.422, P<.01$ ；把握可能感 $r=.391, P<.01$ ；処理可能感 $r=.419, P<.01$ ）（自己主張性：有意味感 $r=.280, P<.01$ ；把握可能感 $r=.157, P<.05$ ；処理可能感 $r= -.250, P<.01$ ）を示した。さらに，抑うつとでも，優越感有能感と自己主張性のみが有意な負の相関（優越感有能感 $r= -.412, P<.01$ ；自己主張性 $r= -.276, P<.01$ ）を示した。これらの結果から，自己愛の下位尺度の中でも注目賞賛欲求と優越

感有能感および自己主張性とは傾向が異なることが示された。

他者評価過敏性は規範意識度と有意な正の相関 ($r=.209, P<.01$) を示し，同じく抑うつとも有意な正の相関 ($r=.278, P<.01$) を示した。また SOC の3下位尺度のすべてと有意な負の相関（有意味感 $r= -.224, P<.01$ ；把握可能感 $r= -.518, P<.01$ ；処理可能感 $r= -.207, P<.01$ ）を示した。

SOC の3下位尺度は抑うつと有意な負の相関（有意味感 $r= -.751, P<.01$ ；把握可能感 $r= -.492, P<.01$ ；処理可能感 $r= -.726, P<.01$ ）を示した。

3-3 クラスタ分析による各パーソナリティ群の抽出

自己愛と他者評価過敏性および規範意識度の関係の中で，いくつかのパーソナリティのパターンがあることを仮定し，“新型うつ”のパーソナリティ群（高い自己愛，高い他者評価過敏性，低い規範意識）と他のパーソナリティ群を抽出することを目的として，クラスタ分析を行った。

クラスタ分析では，“新型うつ”パーソナリティとして選択した，自己愛尺度の3つの下位尺度である「注目賞賛欲求」，「優越感有能感」，「自己主張性」得点と「他者評価過敏性」得点，「規範意識度」尺度得点の標準得点5つを投入変数として行った（平方ユークリッド距離を用いた Ward 法による）。

結果，テンドグラムの解釈のしやすさから，以下の4つのクラスタが抽出された。結果を Figure 1 に示す。第1クラスタには47名，第2クラスタには42名，第3クラスタには44名，第4クラスタには47名の調査対象者が含まれていた。

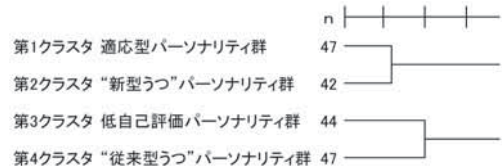


Figure 1 クラスタ分析デンドグラム略図

次に，各クラスタの独立性を検証し，その特徴を探るために，得られた4つのクラスタを独立変数，「注目賞賛欲求」「優越感有能感」「自己主張性」「他者評価過敏性」「規範意識度」を従属変数とした分散分析を行った。その結果，すべての従属変数に有意な群間差が見られた。（「注目賞賛欲求」： $F(3, 176) = 31.40, P<.01$ ）（「優越感有能感」： $F(3, 176) = 17.57, P<.01$ ）（「自己主張性」： $F(3, 176) = 93.09, P<.01$ ）（「他者評価過敏性」： $F(3, 176) = 61.15, P<.01$ ）（「規範意識度」： $F(3, 176) = 23.16, P<.01$ ）

Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行ったところ，「注目賞賛欲求」については第2クラスタ>

第1>第4>第3, 「優越感有能感」については第1クラスター>第2>第4>第3, 「自己主張性」については第1クラスター>第2>第3>第4, 「他者評価過敏性」については第4クラスター>第2>第3>第1, 「規範意識度」については第4クラスター>第3>第1>第2, という結果が得られた。その結果をもとに各クラスターの命名を行った。第1クラスターは「自己主張性」と「優越感・有能感」が高いが「他者評価過敏性」が低いので, 自らの意見や考えを持っており周囲の目に左右されない傾向があるとして「適応型パーソナリティ群」とした。第2クラスターは「注目賞賛欲求」と「自己主張性」, さらに「他者評価過敏性」も高い一方で, 「規範意識度」が低い, いわゆる“新型うつ”の病前性格に一致していることから, 「“新型うつ”パーソナリティ群」とした。第3クラスターは自己愛の下位尺度である「注目賞賛欲求」「優越感有能感」「自己主張性」がすべて低く, また「他者評価過敏性」も低いので, 自分に対する評価が低く, 他人から褒められても自分のことのように思えない傾向があると考え「低自己評価型パーソナリティ群」とした。第4クラスターは「注目賞賛欲求」が高く「自己主張性」が低かった。一方で「他者評価過敏性」と「規範意識度」が高く, テレンバッハのメランコリー型性格, 下田の型執着型性格に近い傾向を持つことから「従来型うつ”パーソナリティ群」とした。(Figure 2) (Table 3)

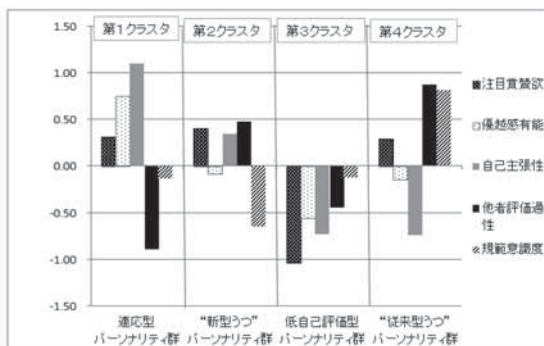


Figure 2 クラスターごとの特徴

Table 3 クラスターごとの各尺度の平均値、標準偏差と分散分析結果

	1 適応型 パーソナリ ティ群	2 “新型うつ” パーソナリ ティ群	3 低自己評価 パーソナリ ティ群	4 従来型うつ パーソナリ ティ群	F 値	下位検定
注目賞賛欲求	0.32 (.95)	0.40 (.65)	-1.03 (.77)	0.29 (.84)	31.40 *	2,1,4>3
優越感有能感	0.75 (.83)	-0.09 (.92)	-0.56 (.81)	-0.14 (.97)	17.57 *	1>2,4,3
自己主張性	1.10 (.69)	0.35 (.61)	-0.72 (.47)	-0.73 (.70)	93.09 *	1>2>3,4
他者評価過敏性	-0.89 (.70)	0.48 (.60)	-0.44 (.88)	0.88 (.61)	61.2 *	4>2>3>1
規範意識度	-0.13 (.88)	-0.65 (.87)	-0.12 (.93)	0.82 (.73)	23.16 *	4>3,1>2
n	47	42	44	47	df =3,17	* p<.05

平均値 (SD)

各群ごとに性別 (男性と女性), 年代 (20歳代と30

歳代) の偏りを調べるために人数の差を検討した。χ²検定を行ったところ, 人数比率に有意差は見られなかった。

3-4 各パーソナリティ群が SOC に及ぼす影響, および各パーソナリティと SOC が抑うつに及ぼす影響についての検討

各パーソナリティ群 (クラスター) が SOC に及ぼす影響と, 各パーソナリティ群 (クラスター) と SOC が抑うつ傾向に及ぼす影響を測るために, 各パーソナリティ群をダミー変数とした階層的重回帰分析を行った。解析は強制投入法による。そして, その結果をもとに正規化カテゴリースコアを求める処理を行い, 標準偏回帰係数を求めた。手順はアイテムごとにダミー変数のケース数と偏回帰係数を掛け, それを合計する。そこで, 偏回帰係数からこの値を差し引く。なお, この値は数量化 I 類による分析の正規化カテゴリーに一致する。その結果, 得られた標準偏回帰係数を Table 4 に示す。また重回帰分析に基づくパス図を Figure 3 に示した。

パーソナリティ群が SOC に及ぼす影響では, まず「適応型パーソナリティ群」では, 有意味感, 把握可能感, 処理可能感ともに有意な正の標準偏回帰係数を示した。

「“新型うつ”パーソナリティ群」では有意味感, 把握可能感, 処理可能感ともに負の標準偏回帰係数を示した。

Table 4 各パーソナリティ群が SOC に及ぼす影響および各パーソナリティ群と SOC が抑うつに及ぼす影響についての重回帰分析結果

①各パーソナリティ群が SOC に及ぼす影響

	有意味感	把握可能感	処理可能感
適応型	.47 **	.59 **	.56 **
“新型うつ”	-.12	-.44	-.24
低自己評価型	-.33	.16 **	-.14 **
“従来型うつ”	-.05	-.34	-.22

②各パーソナリティ群と SOC が抑うつに及ぼす影響

	抑うつ
適応型	-.14
“新型うつ”	.07
低自己評価型	.06
“従来型うつ”	.01
有意味感	-.48 **
把握可能感	.01
処理可能感	-.35 **

数値は標準偏回帰係数 (β) **p<.01

「低自己評価型パーソナリティ群」では把握可能感に有意な正の係数が示され、有意味感と処理可能感には負の標準偏回帰係数が示された。

「従来型うつ」パーソナリティ群」では有意味感、把握可能感、処理可能感ともに負の偏回帰係数を示した。

なお、各パーソナリティ群からSOCを媒介しない抑うつ傾向への直接の影響はほぼなかった。

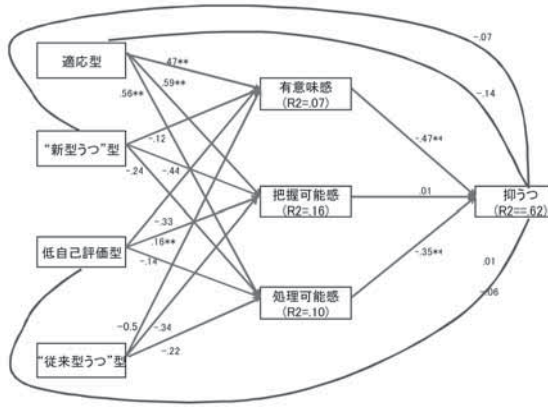


Figure 3重回帰分析に基づくパス図

4 考 察

4-1 結果の概略

4-1-1 各尺度間の相関について

まず「新型うつ」のパーソナリティの要因として選択した、自己愛、他者評価過敏性および規範意識度について考察する。自己愛の3つの下位尺度（注目賞賛欲求、優越感有能感、自己主張性）と他者評価過敏性の間では注目賞賛欲求が有意な負の相関を示したのに対して、優越感有能感、自己主張性は有意な正の相関を示した。このことは、注目・賞賛欲求は他者から注目や賞賛をされたい欲求であり、一方、優越感・有能感強い自己肯定感、自己主張性は自分の考えを自己中心的に他者に主張する行動、を意味する、という小塩（2008）の結果とも一致していると考えられる。次に自己愛の3つの下位尺度と規範意識度では、自己主張性が規範意識度と有意な負の相関を示した。本研究では山口（1998）の集団主義尺度を規範意識度尺度として使用しており、その中で山口は集団主義を「個人の目的よりも集団の目的を優先すること」と定義している。自己中心的な傾向を示す自己主張性と規範意識度が負の相関を示したことは、山口の定義と一致していると考えられた。他者評価過敏性と規範意識度の間では有意な正の相関が示された。これは他者評価と規範はともに外的な基準であるということが影響したと推測される。

次に自己愛尺度の3つの下位尺度とSOCの3つの下

位尺度（有意味感、把握可能感、処理可能感）の間の相関をみると、優越感有能感と自己主張性がSOCの3つの下位尺度と有意な正の相関を示した。さらに、自己愛尺度の3つの下位尺度と抑うつ傾向とでも、優越感有能感と自己主張性のみが有意な正の相関を示した。このことから優越感有能感と自己主張性の高さは精神的な健康度の高さにつながる事が推測された。

また他者評価過敏性とSOCの3つの下位尺度の間では、すべて有意な負の相関を示した。このことは、山崎（2001）の、SOCでは自己を周囲の人々や環境と対峙するものではなく、周囲の人々や環境とともにあることを想定している、とした概念と、相手と対峙して評価される自分ではなく、相手とともにいる自分という点において、一致していると考えられる。

最後に、SOCの3つの下位尺度と抑うつ傾向がすべて有意な負の相関を示していることは、奥津ら（2008）の研究で、SOCが高いと抑うつ度が低く、SOCが低いと抑うつ度が高い傾向にある、としているものと結果を同じくしていた。

以上のことから、今回着目したパーソナリティ（自己愛、他者評価過敏性、規範意識度）とSOCさらに抑うつには一定の関係性があることが示された。

4-1-2 各パーソナリティ群の特徴について

次に、パーソナリティ（自己愛、他者評価過敏性、規範意識度）にはいくつかのパターンがあることを想定して、そのパターンを抽出するためにクラスタ分析を行い、4つのクラスタを得た。

「適応型パーソナリティ群」（第1クラスタ）は次のような特徴を持つ。まず自己愛の3つの下位尺度全てが高く、その中でも自己主張性と優越感・有能感が高い値を示した。これは小塩・小平（2005）が自己愛人格目録短縮版の主成分分析で得られた自己愛総合と注目－主張という2成分の組み合わせで分類した、自己愛全体が高く自己主張性が優位な者に相当する。小塩・小平（2005）は自己愛全体が高く自己主張性が優位な者は理想自己と現実自己の不一致が小さいとしており、適応性は高いと考えられる。また自己主張性が高く、他者への依存を示す他者評価過敏性が低いので、自らの意見や考えを持っており周囲の目に左右されない傾向があるといえ、精神的健康度は高いことが予測される。さらに規範意識度は中程度であり、組織よりも自分を優先させる傾向は強くないため、この点からも適応的といえると考えられる。

「新型うつ」パーソナリティ群」（第2クラスタ）は次のような特徴を持つ。自己愛の下位尺度の中で優越感有能感はやや平均的だが、注目賞賛欲求と自己主張性が高い。また他者評価過敏性も高い一方で、規範意識度が低い、いわゆる「新型うつ」の病前性格に一致している。また自己愛全体としては高く、注目賞賛欲求が自己主張性に比して優位であるため、小塩・小

平 (2005) の分類では、他人と仲良くできることや他人に好かれることを理想とする傾向があるとしている。また他者評価過敏性が高いことから、自己の評価は他人に依存しており、そのため精神的健康度は低いことが推測される。

「低自己評価型パーソナリティ群」(第3クラス) は次のような特徴を持つ。自己愛の下位尺度である、注目賞賛欲求、優越感有能感、自己主張性がすべて低く、また他者評価過敏性も低かった。小塩・小平 (2005) の分類ではまるものはなかった。自分に対する評価が低く、他人から褒められても自分のことのように思えない傾向があると考える。精神的健康度も低いことが推測される。

「従来型うつ” パーソナリティ群」(第4クラス) は次のような特徴を持つ。自己愛の下位尺度のうち、注目賞賛欲求が高く、依存性が強い面がある一方自己主張性が低く、言いたいことも我慢してしまう傾向がある。一方で他者評価過敏性が高いので、周りを気にする特徴があることと、さらに規範意識度も高い傾向がある。これらはテレンバッハのメランコリー型性格 (1961)、下田 (1950) の執着型性格にほぼ同じ傾向であるといえる。小塩・小平 (2005) の分類では「“新型うつ” 型パーソナリティ群」(第2クラス) と同じである。精神的健康度も低いことが推測される。

以上から、精神的健康度の面では「適応型パーソナリティ群」(第1クラス) のみが高く、それ以外の群は低いという傾向があると推測された。

4-1-3 各パーソナリティ群が SOC に及ぼす影響、および各パーソナリティと SOC が抑うつに及ぼす影響について

以上のクラス分析を踏まえて、各パーソナリティ群が SOC に及ぼす影響および各パーソナリティ群と SOC が抑うつ傾向に及ぼす影響を測るために各パーソナリティ群をダミー変数とした階層的重回帰分析を行った。

まず各パーソナリティ群から SOC を媒介しない抑うつ傾向への直接の影響はほぼなかった。このことから SOC が抑うつ傾向に対して何らかの影響を与えていると考えられる。

各パーソナリティ群と SOC の3つの下位尺度の関係では「適応型パーソナリティ群」で、有意味感、把握可能感、処理可能感のすべて下位尺度に有意な正の標準偏回帰係数を示したが、それ以外のパーソナリティ群では有意な標準偏回帰係数は示されなかった。このことにより、“新型うつ” パーソナリティ群においても SOC に対する大きな影響はなかったことが考えられた。ただ、有意味感、把握可能感、処理可能感のすべての下位尺度に対して負の標準偏回帰係数を示したことで、“新型うつ” パーソナリティ群の中でも、そのパーソナリティ傾向が高ければ SOC は低くなる

と考えられた。このことから、中村 (2008) が指摘した、現在の「職業に対する同一化が図られにくい状況」では、仕事に対して意味を持つにくいために、どんなことにも意味を見出し価値があると思える感覚である「有意味感」は、規範意識度が低い“新型うつ” パーソナリティ群ではその状況の影響を強く受けている群と推測された。また、これからの見通しをある程度予測できる感覚である「把握可能感」や出会う出来事に対して何とかできるだろうと思える感覚である「処理可能感」も、世代間のディスコミュニケーションがある状況(岩間, 2011)では、経験が浅く多くの対処パターンを持たない若年者は低くなると考えられる。その中でさらに“新型うつ” パーソナリティ群は他者評価過敏性が高いために、自分の力の限界を認めて他者に依存することができないといった傾向があると推測されるので、「把握可能感」や「処理可能感」が低くなっていると考えられる。

ここで“新型うつ” パーソナリティ群と同様の傾向を示した「“従来型うつ” パーソナリティ群」との違いが問題になるが、SOC に関してその差異となる要因は、これまでの知見に基づいて推測すると、自分のためというよりも周りの目を気にして仕事をする傾向がある「“従来型” うつパーソナリティ群」は仕事に意味を見出すという感覚に乏しく、また自分の能力を超えてでも仕事を引き受けてしまう傾向が「把握可能感」や「処理可能感」を低めている要因になっていると考えられた。

また「低自己評価型パーソナリティ群」では、「把握可能感」に低いながらも有意な正の偏相関係数が示された。状況を把握し先を見通せる感覚としての「把握可能感」自体はあるが、それは、仕事に置き換えた場合、出来る、出来ないも含めての把握ということになると考えられる。

SOC の3つの下位尺度と抑うつ傾向の関係では、「有意味感」と「処理可能感」に有意な負の偏相関係数が示された。これは奥津ら (2008) が示した、SOC が高いと抑うつ度が低く、SOC が低いと抑うつ度が高い傾向にある、という指摘に一致した。ただ、「把握可能感」については有意な偏相関係数は示されなかった。奥津らの研究では SOC を下位尺度ごとには測っていないため、その要因は本研究では明らかにできなかった。

以上を踏まえ、パーソナリティ群の SOC の3つの下位尺度を媒介とした抑うつ傾向について、「適応型パーソナリティ群」と「新型うつ” パーソナリティ群」を比較する。「適応型パーソナリティ群」は SOC が高く、抑うつ傾向が低いという関係を示したが、逆に「“新型うつ” パーソナリティ群」は SOC が低く、抑うつ傾向は高いという関係を示した。このことにより、抑うつ傾向に対して SOC は一定の要因となりえるこ

とが推測された。ただ SOC の重回帰式での説明率が著しく低い値を示しているため、SOC はあくまで一つの要因であり、他の要因の影響が大きいということが妥当と言えると思われる。

4-2 本研究の結論

本研究は“新型うつ”のパーソナリティと抑うつ症状の発症について心理学の知見で検討を行い、有効な介入方法につなげることを目的とした。そして特に“新型うつ”と抑うつとの関連性が示唆される SOC に焦点をあてて検討を行うこととした。

この結果、“新型うつ”パーソナリティと SOC、抑うつ傾向の関係については、「“新型うつパーソナリティ”は SOC が低いため、抑うつ傾向が高い」（すなわち、自己愛、他者評価過敏性が高く、規範意識が低いものは SOC が低く、抑うつ傾向が高い）という仮説モデルと同じ傾向を示し一定の結果は得られたが、有意な値ではないので、あくまで傾向としての結果を得られたに過ぎない。“新型うつ”に対する介入としての SOC の有効性も同様である。

4-3 本研究の問題点と今後の課題

以下の本研究の問題点と今後の課題について述べる。まず有意な結果が出なかったことについて様々な要因が考えられるが、現時点では①社会・文化的背景の変化による影響などパーソナリティだけで測ることは難しかった②本研究ではパーソナリティに注目したが、“新型うつ”パーソナリティの行動の特徴である「回避」を含めなかった③本研究の協力者はほぼ健常者であると思われる。そのため統計上の切断効果があった可能性がある④本研究は、横断的研究であり、パーソナリティ傾向が時間の経過によって抑うつに影響を考慮していない⑤“新型うつ”の一部は適応障害、双極性障害などの疾病の亜型である可能性もあり、そもそも“新型うつ”を一括りにすること自体に無理があった、などが考えられる。

⑤については、や日本うつ病学会がうつ病の治療ガイドラインで示した、「若年者の軽症抑うつ状態の研究の一側面を切り取った現代型（新型）うつは、マスコミ用語であり、精神医学的に深く考察されたものではない」という考えや鍋田（2012）が示した、自己愛は“新型うつ”のパーソナリティではなく対処方略の結果、との考えとも通底していると考ええる。

4-4 まとめ

“新型うつ”と同様の病像を持つ患者の存在は30年以上も前から指摘されてきた（笠原・木村,1975；広瀬,1977）。はっきりとした疾病名をつけられないこの“あいまい”な症状を訴える患者に対して、心理臨床家は対応してきた。うつ病ということで十把一絡げにせず、一人ひとりの抱える問題についてきめ細かく対応してきた。“新型うつ”はもともと一括りにはできない対象であったとするなら、はっきりとした結果が

得られなかった本研究の結果は妥当といえるのかもしれない。

社会の風潮が以前ほど役割や規範意識を強調しなくなった社会（樽見・神庭,2005；中村,2008）において、若年者（若年者に限らずと言った方が正しいかもしれないが）の精神的成熟に年数がかかるようになっていっている。一方、若年者を迎え入れる職場も長引く経済の低迷の影響で、余裕がなくなっており（日本生産性本部,2012）、若年者にとって、うつ病・抑うつ状態が増えやすい労働環境になっている可能性がある。このような状況下で“新型うつ”なるものに対応するためには“成長”というキーワードが若年者と若年者を受け入れる側、双方にとって重要であると言えるだろう。そしてそれは、今に始まったことではない。しかし「職場に人を育てる余裕がなくなっている」という環境下では、社会構造の変化を反映した、組織への帰属意識が低下している若い世代の特徴を理解するのが難しくなっている、ということが、現代に“新型うつ”が増加している一因であるだろう。そしてこのような環境下で若年者が「心の病」を発症した場合、個人の要素も無視はできないが、企業側の責任もあると言えるのではないだろうか。そのため、今後より、若年者への理解というものが企業運営にとって重要になってくるだろう。そこで SOC の視点に基づく介入の有効性についても引き続き考えていきたい。

最後に、精神医学で判別が難しいとされた「怠けうつか」という命題については、本研究でも答えは出なかったが、これもはっきりとは線引きすることは難しく、結局、一人ひとりの抱える問題についてきめ細かく対応することでしかわからないのだろう。その意味ではっきりと線引きできない“あいまい”なものを大切にするという心理臨床家としての心構えがやはり大切になってくると考える。

引用文献

- 阿部 隆明 (2001). 未熟型うつ病, 最新精神医学, 6, 135-143
- Antonovsky A (1987). Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well, Jossey-Bass Publishers, 山崎喜比古・吉井清子 (監訳) (2001). 健康の謎を解く: ストレス対処と健康保持のメカニズム, 有信堂
- 藤里 紘子・小玉 正博 (2009). 首尾一貫感 (Sense of Coherence) とストレス反応, および対処方略との関連, ヒューマン・ケア研究, 10 (1), 23-33
- 広瀬 徹也 (1977). 逃避型抑うつについて, 宮本忠雄編「躁うつ病の精神病理」2, 弘文堂, 61-86
- 岩間 夏樹 (2011) "組織" と "意識" との間 - 若者のメンタリティの変化に適應できない企業組織 -

- 産業人メンタルヘルス白書2011年版, 96-105
- 笠原 嘉・木村 敏 (1975). うつ病の臨床的分類に関する研究, 精神神経学雑誌, 77 (10), 715-735
- 笠原 嘉 (1973). 現代の神経症—とくに神経症性 apathy (仮称) について, 臨床精神医学, 2 (2), 153-162
- 笠原 嘉 (1978). 退却神経症という新しいカテゴリーの提唱, 中井 久夫・山中 康裕編: 思春期の精神病理と治療, 岩崎学術出版, 287-319
- 小塩 真司・小平 英志 (2005). 自己愛傾向と理想自己—理想自己の記述に注目して—人文学部研究論集 (中部大学), 13, 37-54
- 松浪 克文・上瀬 大樹 (1991). 現代型うつ病, 精神療法, 32, 308-317
- 松崎 一葉 (2010). 職場不適応への実践的対応—未熟な人材をどのように支援し成長を促すか—, 第17回日本産業精神保健学会: 教育講演 I, 産業精神保健, 18 (4), 286-290
- 松崎 一葉・吉野 聡 (2011). よくわかる新型うつ, 現代けんこう出版
- 鍋田 恭孝 (2012). うつ病がよくわかる本, 日本評論社, 281-282
- 中村 敬 (2008). 現代のうつ病像への一視角, 臨床精神医学, 37 (9), 1171-1174
- 日本うつ病学会 (2012). 日本うつ病学会治療ガイドラインⅡ. 大うつ病性障害
- 日本生産性本部メンタル・ヘルス研究所 (2012). 第6回『メンタルヘルスの取り組み』に関する企業アンケート結果
- 奥津 文子・赤澤 千春・高野満希子・竹下 麻美・中嶋 文子・ベッカー. カール. ブラッドリ (2008). 適応障害と首尾一貫感覚との関連性について, 木村看護教育振興財団看護研究集録, 14, 9-17
- 坂戸 薫・坂戸美和子 (2005). うつ病と最も関連するパーソナリティ特徴は?—当世うつ病前性格事情—, 広瀬徹也・内海健編『うつ病論の現在 精緻な臨床をめざして, 星和書店, 69-86
- 笹川 智子・金井 嘉宏・村中 泰子・鈴木 伸一・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2004) 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み—項目反応理論による検討—, 行動療法研究, 30 (2)
- 関 陽一, 根津 克己 (2014) 東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学研究 14, 161-168
- 島 悟 (2010). 最近の若年労働者の精神的特徴とメンタルヘルス不調, 産業ストレス研究, 17 (2010), 83-87
- 下田 光造 (1950). 躁鬱病に就いて, 米子医学雑誌, 2 (1), 1-2
- Tanaka,E., Sakamoto,S., Ono,Y., Fujihara,S., & Kitamura,T. (1998). Hopelessness in a community population : Factorial structure and psychosocial correlates, The Journal of Social Psychology, 138(5), 581-590
- 樽味 伸・神庭 重信 (2005). うつ病の社会文化的試論—とくに「ディスチミア親和型うつ病」について, 日本社会精神医学会雑誌, 13 (3), 129-136
- 樽味 伸 (2005) 現代社会が生む“ディスチミア親和型”, 臨床精神医学, 34 (5), 687-694
- Tellenbach,H(1961). Melancholie (Problemgeschichte Endogenitat Typologie Pathogenese Klinik Mit einen Exkurs in die manisch-melancholische Region)
- Berlin: Springer-Verlag. (木村敏訳 (1985). メランコリー, みすず書房)
- Yamaguchi,S., Kuhlman,D., M., Sugumori,S (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. Journal of Cross-Cultural Psychology, 26, 658-672
- 山崎喜比古 (2009). ストレス対処力 SOC (Sense of Coherence) の概念と定義, 看護研究, 42 (7), 479-490
- 山崎喜比古 (2001). ストレス対処能力 SOC に関する実証研究の到達と課題, 日本健康教育学会誌9 特別号

Psychological consideration about the association between "new type depression" character tendency and depression ～ Focus on Sence of Coherence ; SOC ～

Yoichi SEKI (*United Graduate School of Child Development Osaka University*)

Katsumi NEZU (*Tokyo Seitoku University*)

Increase of so-called "new-type depression" with a depressed image different from the past is pointed out in recent years. A change in social structure and educational influence are pointed out as a factor of development of "new-type depression", but also there is also voice which points a problem in an upbringing face of human resources out to lack of communication of a workplace.

Personality of "new-type depression" and a depressive illness-like relation were considered by knowledge of psychology by this research and influence of the stress handle ability to have something to do with upbringing of human resources (Sence of Coherence ;SOC) was considered. The relation to which a person of the personality tendency says SOC was low and that the depression tendency was high resulted "new-type depression", and was indicated.

Key words: "new type depression", SOC (Sence of Coherence), narcissism

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University

2015, Vol. 15, pp. 9-18